乱調文学大辞典

家族八景

筒井康隆全集 11

乱調文学大辞典
家族八景

新潮社

乱調文学大辞典・家族八景

筒井康隆全集　第11巻

昭和五十九年　二月二十日　印刷
昭和五十九年　二月二十五日　発行

定価一五〇〇円

著者　筒井康隆

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一（〒一六二）
電話　業務部　東京（〇三）二六六－五一一一
編集部　東京（〇三）二六六－五四一一
振替　東京　四－八〇八番

印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasutaka Tsutsui 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-644411-9 C0393

筒井康隆全集第十一巻・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

短篇

郵性省……9
法外な税金……21
ブロークン・ハート……22
差別……24
最初の混線……25
客……27
遠泳……29
フォーク・シンガー……30
いいえ……31
新宿コンフィデンシャル……32
アル中の嘆き……52
消失……53
女の年齢……54
鏡よ鏡……55
経理課長の放送……56
将軍が目醒めた時……71

エッセイ

あなたも流行作家になれる……101
乱調文学大辞典……150
集積回路……217

連作長篇

家族八景……231
解説……佐藤信夫 349

乱調文学大辞典・家族八景

装幀　山藤章二

短

篇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

郵性省

美女の大便はでかい、という記事を読んで益夫は猛烈な衝撃を受けた。

記事、といっても二流週刊誌のカラー・ページの記事であるから、嘘か本当かよくわからない。たいてい嘘であろう。

だが、それにしてもその記事はよくできていた。つまり、読者をなるほどと思わせる説得力を持っていたのである。

書いているのは医学博士、心理学教授の肩書きを持つ大心地伝三郎という人で、益夫は高校三年生ながらも肩書きや地位にはまどわされない常識を持っているから、最初は話半分に読んでいたのだが、だんだん夢中になってその理屈にひきずりこまれてしまった。

その理屈というのは、こうである。

なぜ美女の大便がでかいかというと、それは、その女が美人であればあるほど肛門の括約筋の伸び率が大きいからである。では、なぜ美女の肛門が大きく開くか。それは美女におけるナルチシズムと自己顕示欲というふたつの心理が肛門に及んだ結果である。

ナルチシズムはリビドーを肛門愛の段階にとどめる。だから「あなたは美人ね」と人から言われたり、「わたしって、なんて綺麗なんでしょう」と思ったりするたびに、彼女の尻の穴はだらりと大きく開いてしまうのである。

また、美女は、美女であればあるほど他人の眼を気にし、体面を重んじる。表情や行動に自己規制をあたえねばならないわけであるが、そのため緊張が続く。表情や行動に緊張があたえられた場合、その皺寄せは他人の眼に触れぬ場所へあらわれる。すなわち肛門括約筋が弛緩する。つまり尻の穴が開くのである。

尻の穴が開きっぱなしであれば、これは少しの圧力で当然驚くべき大きさの大便が出るのである。したがって美女の大便はでかいのである。

これが大心地博士の理論だった。

読み終り、益夫は考えこんでしまった。

益夫にはすばらしい美人のガール・フレンドがいる。高校の同級生で、しのぶちゃんという可愛い女の子なのである。してみると、あのつぶらな瞳にえくぼの愛らしい白百合の如きしのぶちゃんも、あっと驚く巨大大便の生産者なのであろうか。

この考えは益夫に、はげしい性的刺戟をあたえた。今までしのぶちゃんに関して想像したいかなるエロチックな事

柄よりも、二倍も三倍もエロチックであった。肌理こまかな純白のお尻の割れ目から、馬の陰茎にも似た太い黄褐色の大便を、もりもりと排出して盛りあげ白く湯気を立てているしのぶちゃんの姿を考えると、益夫は気も狂わんばかりの悩ましさに、とてもそれ以上じっとしていることができなくなってしまった。

じっとしていることができなくなったからといって、まさかしのぶちゃんの家へ駈けつけ、彼女を抱きしめて性的願望を満たすというわけにはいかない。益夫はまだ高校三年生なのである。してみると益夫にできることはひとつしかない。いわずと知れたせんずり、オナニー、手淫、マスターベーション、いろいろと呼びかたがあるが、結局はあの手首から先の上下運動である。

大学受験をひかえているため、益夫は鍵のかかる勉強部屋をあたえられていて、これは家族に発見されぬようオナニーするにはまことに都合がよい。益夫は立ちあがって窓のカーテンをしめ、ベルトはずす手ももどかしく、ズボンとパンツを脱いで下半身をまる出しにし、スプリング軋ませてベッドにひっくりかえった。猥想の対象は、もちろんしのぶちゃんである。

益夫は一度だけ、しのぶちゃんの家へ行ったことがある。その時は家の人がみんな留守で、家の中にはしのぶちゃんと益夫のたったふたりだけ、応接室のソファに並んで腰をおろし、二、三時間話しあった。話の内容は、学友のこと、大学のこと、旅行のこと、将来のこと、その他である。

ふたりが初心でなければ、想い思われの若い男女が二人きり、当然何ごとかが起る筈の時間だった。しかしふたりは高校三年生、互いに相手が異性であることを意識しすぎるほどに意識しているから、キスはおろかほんの少しの指さきの触れあいにさえ、どぎまぎ、おどおど、とても青春小説を地で行くようなあけっぴろげのセックス・シーンなどを展開できるわけがなかったのである。

しかし、手首の運動次第に早めながらの、益夫の空想の中では、ふたりはもっと大胆である。益夫はしのぶちゃんを抱きすくめ、ソファに押し倒すのである。しのぶちゃんは、「やめて」などと言いながらも、眼をうるませ益夫を強く抱き返すのである。とにかく空想のことだから、どんないやらしいことだってできるし、相手のしのぶちゃんにどんな振舞いを演じさせることだってできる。

好き放題の空想にふけった末、ついに益夫は恍惚状態に達した。

その時である。

ベッドの上の益夫の姿が、忽然として消失した。つまり、ぱっと消えた。

と、同時に益夫は、今まで空想していたその場所、すなわちしのぶちゃんの家の応接間の、床上一メートルほどの

宙にあらわれ、ソファの上にずしんと落下した。
一瞬のうちに益夫は、自分の部屋のベッドの上から、一キロ以上離れているしのぶちゃんの家の応接室へと移動したのである。そんな馬鹿な、と言ったところで、ほんとなのだからしかたがない。
折も折、その応接室では、しのぶちゃんの家族全員が、食後のコーヒーでくつろいでいた。つまり一家団欒の最中だった。
家族というのは、しのぶちゃんのパパとママ、それに結婚適齢期でしのぶちゃん級の美人の姉さんである。これにしのぶちゃんが加わって、家族四人でコーヒーを飲んでいるところへ、ソファの上の宙を突き破って、下半身をまる出しにし、勃起した陰茎をしっかり握りしめ、オルガスムスのため瞳孔を拡げ、うつろな表情をした益夫が落下してきたのである。しかも悪いことには、益夫が落ちたのはソファに腰かけていた美人の姉さんの膝の上だった。
「げっ」
「わあっ」
「きゃあっ」
家族全員が驚いて大きな悲鳴をあげたが、これは驚くのがあたり前、もし驚かなかったらどうかしている。膝の上へ生殖器丸出しの若い男に落ちてこられたショックのため、美人の姉さんなどはぎゃっと叫んで身をのけぞらせ、たちまち気絶してしまった。
落下した瞬間に射出された益夫の精液は、テーブルの上空に弾道軌跡を描き、しのぶちゃんの父親、造船会社重役の襞地氏が持っていたブラック・コーヒーのカップの中へ白い波頭を立ててぼちゃん、と、とびこんだ。
「き、君は、いやお前は、いや貴様は、だいたい、な、な、な」驚愕のあまり口もきけず、襞地氏は眼を丸く見ひらいたまま、スプーンでコーヒーをかきまわすばかりである。
「益夫君」しのぶちゃんは、手で口を押えたまま、押し出すようにそう叫んだ。「益夫君じゃないの」
「まあっ。ではあなたは、娘のボーイ・フレンド」ヒステリー気味らしい母親がすっくと立ちあがり、怒りに唇をわなわなと顫わせながら叫んだ。「なんて、いやらしい。高校生ともあろうものが。しのぶと絶交してください。不良です。これはＰＴＡの総会にかけます。だいたい何ですか。ま、ま、まる出しにして。そ、そんな下品な。けだもの。けだものみたいなものをむき出しに。げ、げ、げ、下劣な。きい」
もはや何を口走っているか自分でもわからず、彼女は興奮のあまり、砂糖壺をつかんで益夫に投げつけた。
驚いた、という点では、益夫とて同様だった。射精の寸前、身がふんわり宙に浮くような感じがしたかと思うと、だしぬけに、今の今まで空想していたしのぶちゃんの家の

応接室の、まさにそのソファの上へ落下したのである。しかも周囲には、愛するしのぶちゃんをはじめ、その家族たちが、自分の下半身を眼を見ひらいて見つめている。

しばらくは、何が起ったのかのみこめないで茫然としていた益夫も、砂糖壺を投げつけられて、やっとわれにかえり、肝をつぶして立ちあがった。

「ひいっ、あわ、わ、わ」

驚きと同時に、彼はすぐ顔から火の出そうな恥かしさに襲われた。襞地夫人が彼に投げつけた砂糖壺からは、粒のこまかいグラニュー糖がとび出し、それは汗にまみれた益夫の下半身一面に、白くべったりとくっついている。

まだ完全に萎縮しきっていない砂糖まみれの陰茎を手で押え、益夫は大声で悲鳴をあげた。「ち、ちり紙をください」

全員が混乱しているから、誰かが何か言うたびに事態は収拾がつかなくなる。

「軽蔑するわ。軽蔑するわ」気が顚倒したしのぶちゃんは、可愛い口をまっ赤に大きくあけ、泣きながら地だんだふんでわめき散らしている。

「この、こ、こそ泥め」襞地氏が立ちあがり、怒りに顔を赤褐色に変えてどなりはじめた。「不法家宅侵入だ。平和な家庭の平穏を乱す、ふ、ふ、不届き者」

「泥棒じゃありません」益夫はまた、大声で悲鳴をあげた。大恥をかいた上、泥棒にされたのでは浮かばれない。

「じゃあ、何だ。出歯亀か」と、襞地氏がわめき返した。「怪しからん。他人の家の天井にへばりつき、自慰にふけるとはもってのほか」そんな蝙蝠みたいなことが、できるわけはない。

「ち、ちがいます。ちがいます」益夫がいくら弁解したところで、現に下半身まる出しで出現したのだから、どう思われてもしかたがない。

やっと正気に戻った姉さんが、ふたたび益夫の姿を見て、ひきつけを起さんばかりに泣きはじめた。「わたし、もう、一生結婚しません」

「警察へ電話しろ」襞地氏は夫人に叫んだ。「猥褻物陳列罪だ。警官にひきわたす」

「わあん」あまりのことに、とうとう益夫は大声で泣きはじめた。「助けてください」

「いつも、こんなことしてたのね」しのぶちゃんは、まだ叫び続けている。「不潔だわ。いやらしいわ」

「ちがうよ。誤解だよ。誤解だよ」益夫は涙と汗と、よだれと洟で一面びかびか光る顔をしのぶちゃんに向け、べったりと床に尻を落し、そのままの恰好で彼女の方へいざり寄った。「誤解だよ。助けてえ」

「よ、寄らないで。そばへ寄らないで」しのぶちゃんは顔色を変え、今にも腰を抜かしそうな歩きかたで部屋の隅へ

逃れ、壁にべったり背をつけて、はげしくかぶりを振った。
「ああっ。こっちへ来ないで」
「まだ、狼藉に及ぼうとするかっ」益夫がしのぶちゃんに襲いかかるつもりと誤解した襞地氏は、怒り心頭に発して、壁にかけてあったウインチェスター散弾銃の水平二連をとり、銃口を益夫に向けた。「撃ち殺してやる」
部屋の隅では襞地夫人が、受話器をとりあげ早口に何か喋っている。
「ああん」もはや絶体絶命、体裁プライドすべて投げ捨てた益夫は、黄色いしぶきをあげて勢いよく床のカーペットに排尿しながら、合掌し、お辞儀をくり返した。「こ、こ、殺さないで」
壁に背をつけたままのしのぶちゃんは、なかば放心状態、天井の一角を眺めながら、うつろに呟き続けている。「不潔だわ。不潔だわ」
「はい。そうです。ええ、未成年者ですとも。こういう精神異常者を野放しにしておくなんて、警察はいったい、何をしているんですか。すぐ逮捕にきてください」
「わたし、もう、結婚しません」
「撃ち殺してやる」
「殺さないで。殺さないで。ぼくは死にたくない。花も実もある命です。ぼくを殺すと、あなたは後悔する」
「わたし、お嫁に行けないわ」

パトカーがやってくるまでの数十分、混乱はますますはげしくなって、ついには上を下への大騒ぎ、悲鳴泣き声怒鳴る声、近所の家の人たちが何ごとかと出てくるほどのやかましさである。
やってきた警官に手錠をかけられた益夫は、泣きじゃくりながら襞地氏に懇願した。「お願いです、ズボンを、ズボンを貸してください」
「いったい君は、ズボンをどうしたのだ」襞地氏がいった。
「どこへ脱いだのだ」
「ぼくの家です」
「じゃあ、下半身まる出しのまま、家からここまで走ってきたのか」警官はあきれて、そう訊ねた。「狂気の沙汰だ」
益夫がいくら真実を話したところで、誰も信用するものはいない。それは彼が警察へ連行され、呼び出された益夫の両親も加え取調室で刑事たちに、自分の異常な体験を逐一説明した時も同じだった。
「夢遊病じゃないのか」
「虚言症じゃないのか」
「精神鑑定の必要がある」
「分裂症かもしれん」
とうとう精神病にされてしまった。
「自決しろ」思いもかけぬわが子の猥褻罪で呼び出された頑固者の父が、逆上して怒鳴った。「腹を切って恥をそそ

げ」
「ああ」病弱の母が貧血を起して、取調室の床へぶっ倒れた。
「ぼくはオナニーをしていただけだ」ついに益夫も、ほんとに半狂乱となり、咽喉も裂けよと叫びはじめた。「ひとりで、自分の部屋でオナニーして何が悪い。オナニーは健康にいいんだ。ぼくは食前食後にやるのです」
だが結局は、未成年である上、ふだんは成績優秀でまじめな学生であるとわかり、一時的な錯乱であろうというので、夜遅くになってからやっと許され、益夫は両親とともに家に戻ってきた。
戻ってからもなお、死ね死ねとわめき散らす父親に、受験勉強の疲れで乱心したのでしょうと母親が泣いてとりなしてくれ、そのおかげで益夫はやっと自室に戻ることができたが、ひとりベッドの中で考えれば考えるほど、どうにも腹が立ってしかたがない。
世の中のたいていの男は、ひと眼を避けてひとりこっそりオナニーをしている。そもそもオナニーというものは、もともとひと眼を避けてこっそりやるものであって、これを公開の席上で堂堂とやったりすれば猥褻物陳列罪に問われる。そんなことぐらいは、いくら高校生とはいえ、益夫だってよく知っている。だからこそ、ひと眼を避けてやっているつもりだった。それなのに、なぜ自分だけがこんなひどい、極限状況的な、不条理な仕打ちを受けなければならなかったのか。なぜ自分にだけ、オルガスムスの瞬間に空間を移動するなどという超自然的SF的な現象が起ったのか。
いくら考えても、わからなかった。わからないのが当然で、わかるような前例がないからこそ気ちがい扱いにされたのだ。
そもそもあの二流週刊誌がいかん、と、益夫は思った。あれが自分を興奮させ、衝動的にオナニーをやらせたのである。さらにいうならば、あんな記事を書いた大心地とかいう学者が、自分をこんなひどい目にあわせたのだ。
よし、明日になればあの教授に電話して、ひとこと文句を言ってやろう、と、さらに益夫はそう思った。そういえばあの学者は、医学博士で心理学教授だから、もしかするとこの不合理な超物理現象の謎を、解いてくれるかもしれんぞ。明日、登校しなければならないと考えると、益夫は気が重かったが、なんとか自分の気持をなだめすかして、やっと眠ることができた。
さいわいにも、しのぶちゃんの家族は、益夫の将来のことを考えてか、あれ以上騒ぎ立てるのをやめ、学校にも黙っていてくれたようであった。次の日益夫が登校しても、学友たちは、前夜の事件を誰ひとり知らぬ様子だったので、益夫はほっとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.